

浮舟の世界

—存在の不安と死、そして出家まで—

武原弘

浮舟が物語に初登場するのは、「宿木」巻後半部である。中君や弁の尼の口語りを通して紹介されるその生い立ち、まさしく寄り辺ない、さすらいの女としての宿命に定められていた。この世に生を承けて以来二十年有、父八宮にはわが子として認知されず、再婚した母中将の君に連れられて東国を転々、継父常陸介の帰京に伴われてこの春都に來たばかり。その浮舟が、亡き大君の「形代」としていま薫の前に引き出されきている巻末の場面で、物語はいわゆる入水潭の話型を借りながら、やがては宇治川の急流に身を投じるであろう浮舟の、文字どおりの流浪の生を跡追って進行することを予告する。

浮舟の物語が本格化するのには、続く「東屋」巻からで、その始発部に描かれる常陸介家の家庭争議の世界は、まさしく「貴族社会の陰画」^(註)とみるにふさわしく、当時の上流社会の矛盾を裏側から映し出す、それ自体この物語の重要な主題の一端を担いうるものなのであるが、さし当たっては、あくまでも不安定な境遇にある浮舟の

浮舟の世界 —存在の不安と死、そして出家まで—

不幸な身の上についてのいちはやい物語内状況化として読まれよう。すなわち、母中将の君の尽力によってすでに成立していた浮舟と左近少將の婚約が、浮舟が介の実子でない理由から突然破約となり、結婚は介の実娘、浮舟の妹に鞍替えされるといふ騒動が惹起する。ここで、新婚の妹のために浮舟の部屋「西の方」(東屋、(6)―三一頁)が横取りされ、浮舟は住む場所を失うという状況が、いかにも暗示的象徴的といわれなくてはならない。身の置き所のない悲しみ、「存在の不安」^(註)——これがいまの浮舟の状況といえるであろう。

彼女の不安状況はさらに深刻化していく。手短かにストーリーを追うことにする。不憫に思つた母中将は、浮舟を介の邸から連れ出し、二条の中君の邸に預ける。が、そこも浮舟にとって安心の場所ではなかった。中君の夫、好色の匂宮にいきなり迫られ、逃げ場を失う。驚いた中将は、三たび浮舟を連れ出し、三条の小家に隠して急場をしのぐ。そこは、索漠たる隠れ家であつた(東屋、(6)―三三頁―三七頁を要約)。こうした物語展開のなかで、いつそう際だつてくるのが、なおも安住の所を得ない浮舟の不安状況であることは

いうまでもない。彼女は、いま世に「隠ろへて」(東屋、(6)一七二頁) 生きるほかない、さすらいの女である。なお、始発部からのこうした物語は、柳井滋氏も説くとおり、継子譚異型を踏まえつつ進行していると考えてよい。

さて、物語本文は、ここにおいてはじめて浮舟の内面心情を描叙する。

君は、うち泣きて、世にあらんこととせげなる身を思ひ屈
したまへるさまいとあはれなり。(東屋、(6)一七一頁)

この世の中には、自分の生きてゆく場所がないとの、浮舟の存在の深みからこみあげてくる不安と悲哀の感情である。さびしい隠れ家での「つれづれ」(同、七六頁)は、いやおうなく、浮舟にわが身の宿世拙さを内省せしめずにはおかなかつたであろう。父に知られず、住むに家なく、世にさすらう己れの存在とはなにか。この不安定な身は、「どこから来て、どこへ行く」のか。

母中将から慰めの手紙を寄せられたその返書の中で、浮舟ははじめて詠歌する。

つれづれは何か。心やすくてなむ。

ひたぶるにうれしからまし世の中にあらぬところと思はまし
かば (東屋、(6)一七六―七七頁)

中将はこれを見て、「幼げに言ひたる」(同)と読んでいる。一人で所在ないはずの隠れ家住まいを「つれづれは何か」、かえって気楽だという浮舟の前書きに引かされての理解なのであるか。古歌世の中にあらぬ所もえてしが年ふりにたるかたちかくさむ

(拾遺集 卷第八 雑上 読人しらず)

に引き重ねてする浮舟の深い厭世の嘆きを、中将は子供っぽい強がり、感傷として受けとめ、その故に娘をいつそうあわれに思つて「ほろほろとうち泣」(東屋、(6)一七七頁)くのである。返歌

うき世にはあらぬところをもとめても君がさかりを見るよしも
がな (同、七七頁)

にも、そうした中将の心意がよく表現されている。

さきの浮舟の歌が、藤井貞和氏の評定のとおり、「雅趣に欠ける」
「拙劣歌」であるかどうか、いまは問わない。重要なのは、ここでの母子間の「なほなほしき」(同)贈答にもかかわらず、両者の内面意識におけるあまりに大きい懸隔である。母中将の理解を超えて、浮舟の厭世感がいかに深刻なものであつたか、浮舟歌中の措辞「世の中にあらぬところ」に注目して、さらに読みを深めてみよう。ここでの「世の中にあらぬところ」とは、いったい奈辺の世界を指して言っているのか。字義どおりに、それは現世ならぬ来世、後生の世と解されてよいが、ここで「ましかば……まし」と仮想されたその世界が、知られるように、物語のはるかな進行のうちに浮舟の現実世界となる。入水死を企てて果たせず、救助されて蘇生後に浮舟が目にする世界、「世の中にあらぬところはこれにやあらん」(手習、(6)一二九二頁)と見、「夢のやうにたどられて、あらぬ世に生まれたらん」(同、二九八頁)と思う世界がこれである。あるいは、「棄ててし世をぞさらに棄てつる」(同、三三九頁)出家後の世界でもある。物語において遠く隔った文脈でのこうした叙述の照応は、さし当っては、「東屋」の巻から「手習」巻に至る、物語作者の構想の確かさを証する表徴として読まれようが、人物浮舟に即して読

的罪責感に苦しんでいたと了解される。日頃から信頼を寄せる姉中君を裏切ったことへの自責の念である。

いよいよ恥づかしく、かの上の御ことなど思ふに、またたけきことなければ、限りなう泣く。(浮舟、(6)―一七頁)

誰も、ものの聞こえあらば、いかに思さむと、まづかの上の御心を思ひ出できこゆれど、……(下略)(同、一二二頁)

こうした中君に対する浮舟の罪責感とはしかに深く、さらに薫に対するそれと重なつて、後々まで「いとあるまじく軽きこと」(浮舟、(6)―一三五頁)、「人笑へ」(「恥」の感覺として彼女を苛み続けている同、一五六頁、一五九頁、一七一頁、一七六頁)。しかし、さらに現実的な処世感覺をもつてするならば、右近が「一方に思し定めしよ」(同、(6)―一七一頁)と言ひ、侍従が強く望んでいるように(同)、匂宮との結婚も浮舟に可能な一選択肢として残されていた。(右近は薫をすすめているが、匂宮も選択可能な「一方」として認める前提に立つての發言である。)もちろん、匂宮との結婚を仮定した場合、浮舟のさらなる不幸は目に見えている。が、ここでの浮舟の苦悩は、そこまで考えてのものではない。浮舟にとつて、匂宮の選択肢ははじめから存在していないが、それを可能にしようとする「世」とたたかつて生きることが彼女の現実、倫理であることの本質は、終始に一貫していたと読み込られるのである。ならば、そうした現実的倫理的罪責感の行きつく末に浮舟の死があつたのか。結論はそれほど単純にもたらされるものでもなからう。

浮舟の苦悩が深刻なのは、「時の間も見ざらむに死ぬべし」と思

し焦がるる」(浮舟、(6)―一二二頁) 情熱的な匂宮にいちはやく傾斜していく彼女が、自身の内部にさきの罪責感とは別の、あるいはより深い存在の不安の意識をかかえていたからである。

心ざし深しとはかかるを言ふにやあらむ、と思ひ知るるるにも、あやしかりける身かな、……(下略)(同)

ここでの「あやしかりける身かな」が、そうした浮舟の存在の不安感表現するものであることは、これに直接する後の物語描写を注意深く読むことによつて、ただちに了解される。すなわち、その不安を存知しえない匂宮が、「かへすがへすいと心愛し。なほあらむままにのたまへ」(同)と浮舟の素姓をたずね、浮舟は「その御答へは絶へてせず」(同)、ただひたすら「なびきたる」(同) 媚態で応ずるだけであるが、この場面描写に形象される浮舟の世界とは、彼女が匂宮になびくことが、中君の妹である己れの素姓を秘匿して明かさないう行動と相即不離でなければならず、それはとりもなおさず浮舟が自己の存在の根柢を不明にすることで始めて可能な、いわば自己存在の否定の不安を必須条件とする愛のはじまりに直面していることを暗示するものである。

物語の作者が「若き心地には、思ひも移りぬべし」(浮舟、(6)―一二四頁)との草子地で確認するように、浮舟はますます匂宮に心ひかれ、その愛欲の世界に溺れていく。その惑溺の絶頂を描く対岸での二人の愛の場面に注目してみよう。

いとかなげなるものと、明け暮れ見出だす小さき舟に乗りたまひて、さし渡りたまふほど、遙かならむ岸にしも漕ぎ離れたらむやうに心細くおぼえて、つとつきて抱かれたるもいとらう

たしと思す。

……(中略)……

年経ともかはらむものかたちばなの小鳥のさきに契るところ

は

女も、めづらしからむ道のやうにおぼえて、

たちばなの小鳥の色はかはらじをこのうき舟ぞゆくへ知られ

ぬ

(浮舟、(6)―一四二頁)

舟の中で、句宮に「つとつきて抱かれ」、「かはらむものか」と永遠を契る宮の詠歌にあわせて「たちばなの小鳥の色はかはらじ」と応える浮舟は、いままさに充足の愛に全身を浸しているとみることが出来る。しかし、同時に彼女は「心細くおぼえて」もあり、その不安の意識のなかでわが身を川面に漂う小舟に比し、「このうき舟ぞゆくへ知られぬ」と詠じ結ばないではおれなかつたのである。この浮舟の物語の中で、「ゆくへ知られぬ」の表現が多用され(「行く方も知らず」などの類似型を含めて、一〇八、一五九、一九六、二〇一、二六四、三三〇、三三九、三四九、三七八の各頁に九例)、寄る辺ない女としての宿世を辿る浮舟の世界を解くキー・ワードと考へることが出来るが、この物語における全用例について、この語句の多様な意味を検討した鈴木日出男氏は、さきの浮舟詠歌においては「浮舟がみずからの将来を生死不明と意識して『行くへ知らず』とする」ものとして評解している。死の予感というにはなお漠たる、そこはかとない存在の不安感というべきものであろうか。この歌の前に叙せられている「遙かならむ岸」は、たしかに「彼岸浄土の連想」^(註1)によっており、「浮舟は現世からあの世に連れ去られるよう

な幻想的感覚に身をゆだねている」と解することによって、ここでの浮舟の不安の意識は正確に跡づけられてくる。

この浮舟の存在の不安は、つまるところ死の不安なのであった。感能の世界に耽溺し続けながらも、浮舟にはその不安の思いが絶えることがない。再びする宮との贈答歌について読もう。

峰の雪みぎはのこほり踏みわけて君にぞまどふ道はまどはず

……(中略)……

降りみだれみぎはにこほる雪よりも中空にてぞわれは消ぬべ

き(浮舟、(6)―一四六頁)

後接の文で、句宮が「この『中空』をとがめたまふ」(同)のは、浮舟が薫と句宮とのどちらとも決めかねている中途半端な気持を詠んだもの、と解したからで、浮舟自身もそれに気づき、「げに、憎くも書きてけるかなと、恥づかしく」(同)、すぐに歌を破っている。しかし、浮舟にとつて「中空」の措辞で表現したかつたその心意は、もつと別の、より深いところにあつた。すでに高橋亨氏の指摘にもあるように、この語は、後に浮舟が入水を決意して宇治川へ歩み出ながらなお現世に思いひかされて躊躇る場所、「行くべき方もまどはれて、帰り入らむも中空にて」(手習、(6)―二八四頁)さまよつた生死の境いと一致していて、「根源的な意味での故郷喪失者としての〈浮舟〉が、自己の存在の位相を直感したことは」^(註2)であり、あるいは、より端的に、小町谷照彦氏が説く「我が身の存在そのもののはかなさを意味する」^(註3)語なのである。この語がいま、「われは消ぬべき」の措辞に連結されるところで、浮舟における死の予感^(註4)はもはや明確となつている。物語にはやく、なにがしの院へ連れ出

浮舟の世界 ― 存在の不安と死、そして出家まで ―

される夕顔が「うはの空にて影や絶へなむ」(夕顔、(1)―三四頁)と詠じ結んで死の予感を出したのと、これが同趣の表現であることは、つとに指摘済みのところである。日ごろ経ての浮舟の詠歌。

かきくらし晴れせぬ峰の雨雲に浮きて世をふる身ともなさばや

(浮舟、(6)―一五二頁)

浮舟の内面において、死の予感さらさら深まって、死への願望とさえなっている。ここでの「雨雲」に「尼」をかけて、浮舟の出家の願望を読みとることも、^(註)じゅうぶん可能であろう。いずれにせよ、浮舟の現世離反の運命は、すでに抗いがたく誘導されつつあったと読むことができる。

以上、浮舟における存在の不安から死への予覚、さらに願望まで、その苦悩の世界について、あらまし検討を加えた。ここで、とくに留意すべき一つの要点がある。存在の不安から死への予覚、願望まで、それは浮舟の苦悩の深化の位相としてとらえられているのではなく、同時進行する不可分一体のものとして彼女の内界にあった点である。見てきたように、宇治川の波間に漂う小舟の中で「このうき舟ぞゆくへ知られぬ」と嘆じた浮舟には、これからどこへ行くのか(これからどうなる身の上か)という存在の不安と同時に、彼岸へ向うかの心細さ、死への予感がいち早く意識されていた。浮舟にとって、身の上の不安は、ただちに死の不安でもあった。ひつきよう、浮舟における存在の不安は死とともにあったのである。

物語において、浮舟を刻一刻と死へ追いつめる状況の漸層描写法は、いささかの間隙もたない確かさにある。描き進められる浮舟の悲劇は、存在の不安状況から死への鮮やかな軌跡を示すかに読み

とられる。が、より厳密な規定に従うならば、それは存在の不安、すなわち死への悲劇なのである。浮舟の入水前後を追いながら、この問題についてさらに考察を進めたい。

三

進退きわまる窮地のなかで、浮舟は死を決意する。物語は、その浮舟の心理を克明に描き辿る。

……いとど心肝もつぶれぬ。なほ、わが身を失ひてばや、つひに聞かにくきことは出で来なむ、と思ひつづくるに、……

^(b) さてわが身行く方も知らずなりなば、誰も誰も、あへなくいみじ、としばしこそ思つたまはめ、ながらへて人わらへにうきこともあらば、……

(浮舟、(6)―一五九頁)

まろは、いかに死なばや。せづかず心憂かりける身かな。……

(同、(6)―一七三頁)

^(a) わが身ひとつの亡くなりなんのみこそめやすからめ。……ながらへば必ずうき事見えぬべき身の、亡くならんは何か惜しかるべき。……ありながらもてそこなひ、人わらへなるさまにてさすらへむ、……

(同、(6)―一七六頁)

多くを省略に従う引用ではあるが、こうした文脈をとおして、浮舟の内面世界にさらに立ち入ってみよう。右において、直接死への思念にかかわる表現語句について、とくに注目し、解析を試みたい。まず、(a)(b)(c)(d)(e)に共通してあらわれる「身」「わが身」について。

浮舟の「身」は、はやく常陸介に冷遇されて「世にあらんこととこそせげなる身」(前掲)、やがて薫と匂宮のはざままで、「今より添ひたる身のうさを嘆き加へ」(浮舟、(6)―一三六頁)「浮きて世をふる身」(前掲)、窮地にあつて「いかにしなすべき身にかあらむ」(浮舟、(6)―一五五頁)と苦惱する、そのような身の上なのであるが、これをさらに対象化して、そのような自己存在として意識するのが「わが身」である。それは、いかにも「浮きたる心地」(同)の不安定存在ではあつた。つぎに、ここで死の動詞表現について吟味する。(c)の「死な」は直接表現であるが、(a)「失ひ」(b)「行く方も知らずなり」(d)(e)「亡くなり」などの語句には、生命の終焉としての死ではなく、存在の亡失、無化としての死を意味する表現性が顕著である。とくに(b)が死の意識を内在させた存在の不安の表現として、浮舟にとりわけ身近なキー・ワードである点については、前述したとおりである。もつとも、ここで重用されている(d)(e)について、この語が、浮舟の死にかかる固有の表現とは必ずしもいえないのであつて、女三宮が密通発覚後、死か出家かを念願する場面の中でも、「尼になりて、もしそれにや生きとまると試み、また亡くなることも」(柏木、(4)―二九一頁)とあり、死の床での大君の思念は、「なほかかるついでにいかで亡せなむ」(総局、(5)―一三三頁)と叙せられている。が、これらの文脈のなかでは、いずれも、「わが身」の形容句がなく、かわつて「え生きたるまじ」「命強ひてとまらば」などの語句が連接しているので、存在の亡失としての死ではない、生命の終末としての死の意識が表現されるのである。浮舟の場合、(a)についてみても、それは失命と読むに当らず、存在の喪失を意味す

浮舟の世界 ― 存在の不安と死、そして出家まで ―

るものと解される。そして、文末詞への留意。(a)(c)は強い願望。(b)の仮定法も、強意を含む。(d)(e)は強い意思を表わす。以上、(a)～(e)の語句成分の分析をおして、ここに浮舟の自己存在亡失への強い願望、意思が表現されていることを読みとることが出来る。

浮舟の死の決意を右のように解釈したうえで、悲劇の終局の場面を読みあらためてみたい。薫と結婚した浮舟にとって、本来ならばそこが身を落ち着けるべき安住の場所であつたらう。まして、京の新邸に迎え入れられる日も決まっていた。心地よげなる「浮舟(6)―一五五頁)母中将の君や乳母とともに、浮舟は、定まつたわが身の上を喜ぶ者でなくてはならなかつた。しかし、匂宮に必ず見つけ出され、「我も人もいたづらになり」(同、(6)―一五六頁)果ててしまふ愛に迫られるのは必定、浮舟にはわが身を処すべき術はなくなつてくる。彼女には、周囲の状況がはつきりと見えていた。「けしからぬ事どもの出で来て」(同、(6)―一五六頁)姉中君には憎まれ、母中将の君からは「また見たてまつらざらまし」(同、(6)―一五九頁)と勘当され、わが身の「人わらへにうきこと」(同)これ以上のもはない。右近の姉の場合と同様、それは「死ぬるにまざる恥」(同、(6)―一七一頁)なのである。このような浮舟の深い思念のなかに、そのほかはありえない唯一の死の道がまつすぐに凝視されるのであるが、ここで注意されるのは、「有明の空を思ひ出づる涙のいとどとめがたき」(浮舟、(6)―一五六頁)「例の、面影離れず、たへず悲しくて」(同、(6)―一七八頁)との叙述で知られるように、匂宮に対する浮舟の強い思慕が最後まで止まない点である。思うに、浮舟に対する匂宮の愛は、薫のそれとはあまりに異つて、身分や素姓を

超越しての、浮舟の存在それ自体へ向つて燃え立つ純粹さであった。それが利那の危うさであったのかどうかは知らないとして、浮舟にとつてはじめて耽溺できる、充足の愛の世界であつたのは確實で、再び増田氏の評言を拝借すれば、「薫との窮屈な關係やそれまでの常陸介のもとの疎外された状態からの解放」^{註15}の世界でもあつた。しかし、浮舟を圍繞する身辺の状況は、けつして彼女にそれを許さない。いっそう苛酷な不安状況のなかで、浮舟が死へと追いつめられていくのは、すでにみてきたごくくなのである。ひつきょう、匂宮もまた、浮舟にとつて安住のよすがではありえない。

死を思念する浮舟が、はやく匂宮になびいた自分を「けしからぬ心」(浮舟、(6)―一五六頁)、「あるまじきこと」(同、(6)―一七九頁)と内省しているのには、留意が必要であろう。この自省は、後から蘇生した浮舟の内界に、再び深く思い辿られている。

親と聞こえけん人の御容貌も見たてまつらず、遙かなる東国をかへるがへる年月をゆきて、(中略)やうやう身のうさをも慰めつべききはめに、あさましようもてそこなひたる身を思ひもてゆけば、宮をすこしもあはれと思ひきこえけん心ぞいとけしからぬ。ただ、この人の御ゆかりにさすらへぬるぞ、(下略)

(手習、(6)―三一九頁)

東国を転々とさすらつた幼少時代から思い起こして、やがて薫との縁でやつと安定しかけたわが身を、匂宮との間に犯した過ちで、今度は死境までさまよう流浪の身の上としてしまったこれまでの生涯を総括し、そこに深い悔悟の念を抱く浮舟であるが、くり返し「けしからぬ」と自責する浮舟の「心」について、今少し立ち入つて吟

味したい。これを、宮との密通後の浮舟に一貫する倫理的道德的反省と解釈して、一部において正当な読みと認められはしよう。が、それだけでは看過される部分も多大なのではない。匂宮との過失が、浮舟のはるか昔からの寄る辺ない、さすらいの生の回想の中におかれてすることに注意したい。すなわち、薫との結婚で、寄る辺ない浮舟の身が「思ひさだめ」られていたのを、「宮を、すこしもあはれと思ひきこえ」のために「もてそこなひたる身」としてしまつたとする内心語は、絶えざる存在の不安とそこからの救出を生きて破滅した浮舟の悲劇のモノローグなのである。浮舟の生は、いつでも存在の不安ともにあつた。薫も、浮舟の不安を根底から救いとする、安住のよすがではなかつた。浮舟が匂宮に恋慕を寄せ、傾倒するのは、その愛が彼女の存在に即自の、充足と安らぎの世界を与えてくれたからである。そこで犯した浮舟の過ちとは、不倫の罪といふべく、それ以上に、感能の世界に感溺することでの生の不安を忘却しようとする、人間存在の弱さ、不確かさへの自己投棄であつたといえよう。そして、浮舟がいま「けしからぬ心」として悔後しているのは、それなのである。

死を前にして、浮舟は、はじめてわが身の「罪」を思う。

親をおきて亡くなる人は、いと罪深かなるものをなど、

(浮舟、(6)―一七八頁)

親に先立ちなむ罪を失ひたまへ、とのみ思ふ。

(同、(6)―一八四頁)

ここでの「罪」が、仏教の教えによる自殺の「罪」を指しているこ

とは自明で、いまそれを經典によつて根拠づけえないが、さし当つては、「親に先だつことによつて、親を悲しませ、それが親の極楽住生の妨げとなる点で、罪業が深い」と理解することができ、死に臨んだ浮舟が、意識の最深部においてこうした「罪」を思うのは、まさしく「最後まで断ち切れない骨肉の恩愛の情を、いわば人間存在の根源と作者は見ていた」と同時に、そのような人間存在の根源に、作者が深い宗教的な眼差し、すなわち、「救われるべき罪への凝視」を持続していたからである。浮舟における存在の不安は、作者のそのような複眼によつて、さらに深奥まで見つめられていく。

四

浮舟は死んではいなかった。横川の僧都に救助され、死の異郷から再び蘇生した。意識を回復した浮舟は、見知らぬ老法師や尼たちにとり囲まれて、まるで「知らぬ国」(手習、(6)―二八三頁)「世の中にあらぬところ」(前掲)に來たかとおたたりを見まわしながらも、「つひにかくて生きかへりぬる」(同、(6)―二八五頁)わが身を認め、泣き臥す。「なほいかで死なん」(同、(6)―二八六頁)、「いかなるものひまに消え失せん」(同、(6)―二八八頁)と再び死を望んだところで、今さらここでそれが果せるはずもなく、棄てきれぬ命の代りに世を棄てるほかはないと、出家を願い出、五戒を受ける。こうして「執念く」(二八六頁)とどまった命のなかで、浮舟は過去の半生を静かに回想し、そのすべてを「夢のやうに」(同、(6)―二九八頁。ただし、大成底本は「夢の世」とする。)思い辿る。そこで

浮舟の世界 ― 存在の不安と死、そして出家まで ―

詠ぜられる二首の手習歌が、いまなお深い孤独のなかにある浮舟の身の上を鮮やかに型どるが、物語のストーリーをなぞるのはここに止め、当面の課題、浮舟における存在の不安と出家の問題まで考論を進めたい。

五戒を受けたものの、それはまだ完全な現世離脱でなく、浮舟にはなおも世にあることの不安が去っていない。「世の中になほありけり、といかで人に知られじ」(手習、(6)―二八八頁)、「思ひの外に心憂ければ、行く末もうしろめたく」(同、(6)―二九〇頁)、「いかなるさまにさすらふべきならむ」(同、(6)―三〇五頁)と叙せられることでの不安は、これまでの浮舟が宿命的に負いつてきたわが身の存在の不安意識の延長上にあるもので、先んじる苦悩の果ての死も、彼女のその不安に対して、何らの解決の端緒をさえずるものでなかつたことが知られるのである。ひつきょう、死は救済ではなかつた。

浮舟は、本来の、正式な出家を懇願する。完全な現世離脱と「後の世をだに、と思ふ心深く」(同、(6)―三三四頁)すなわち来世での救済を願つての切なる懇望に動かされて、僧都はついに受戒、剃髪を断行、浮舟は宿願を果して喜ぶ。「うれしくもしつるかなと、これのみぞ生けるしありて」(手習、(6)―三三七頁)、「なほ、ただ今は、心やすくうれし。(中略)胸のあきたる心地し」(同、三二八頁)と叙せられて、いまの浮舟は深い喜びと平安の思いにみだされている。この心境はその後も変わらず、「この本意のことしたまひて後より、すこしはればれしうなりて」(同、(6)―三四二頁)との安らぎのなかで、彼女は静かに日々の勤行、読経を続ける。この

ように、浮舟における存在の不安は、もはや跡形もなく救いとられ
ているかに見える。

しかし、浮舟には、なおわが身の行く末を思つての不安が消え去
つていなかった。尼の婿中将の出現がそれを再び呼び起こしたのは
事実として、浮舟には生ある限りさすらいの宿世が変わらないので
あろうか。

心こそうき世の岸をはなるれど行く方も知らぬあまのうき木を

(手習、(6)―三三〇頁)

「行く方知らぬ」が、浮舟にはやくからのわが身の存在の不安意識
にかかる固有の表現であることについては、前にも触れた。不安は
まさに、過去から未来への連続の相にある。彼岸を望んでする明け
暮れの精進のなかで、浮舟は往時への追懐の情を断ちえない。彼女
には、いまなお懐しい匂宮であった。

かきくらす野山の雪をながめてもふりにしことぞ今日も悲しき

(手習、(6)―三三三頁)

袖ふれて人こそ見えね花の香のそれかとはふ春のあけぼの

(同、(6)―三四四頁)

追想のなかにはなく、現実には薫が浮舟の前に姿を現わすかも知れ
ない状況の進展にあつて、彼女の不安はさらに大きく、深くなつて
「あはれ」の極みに達するのが、この物語の終巻「夢浮橋」の理想
なのである。

ところで、このように出家後にもなお存在の不安を抱え、人間の
「あはれ」に泣き臥す(手習、(6)―三七四―三七八頁)浮舟像とは、

物語のいかなる主題を担うべく造型されたのであろうか。出家した
浮舟が、果して救済されるか否かという、古くて新しい問題と重合
させつつ、この物語の思想の到達点を究明したい。

出家を遂げた浮舟になお残る不安の意識、人間の情愛の揺曳は、
いま彼岸への旅だちを始めたばかりの彼女にとつて、無理からぬ、
自ずからのものと解することができる。出家直後の浮舟が「悟りの
境地からは遠い^(註19)」のも、むしろ当然の姿といわれるのかも知れな
い。あるいは、浮舟の出家が「純粹な道心に発するものとはいいが
たい」^(註20)「道心なき出家」であつたとする今西裕一郎氏の指摘も首
肯されるので、後の浮舟の不安、たゆたいは、同じ文脈で辿られる
必然の帰結と読むことも可能であろう。いずれにせよ、ここで考慮
すべきは、法衣の下になお消しがたい浮舟の不安、愛執の行く方を
どこまでも追い続ける物語の主題と方法の如何であらう。ここで注
目されるのは、このように未救済の浮舟に対するに、宗教的高みか
らの断罪をもつてするよりは、むしろ温かい人間愛に満ちた救しの手
をさし延べる横川の僧都の態度である。ひたすら精進を続ける浮
舟を背後から見守りながら、やがて薫との關係を知つた彼は、事情
を知らないまま浮舟を出家させた自らの行為を「過ちしたる心地し
て罪深ければ」(夢浮橋、(6)―三六四頁)と後悔し、薫の要請に応
じて、二人の再会を仲介しようと考量する(同)。その条に叙せら
れる僧都の心内語に注意したい。

かたちを変へ、世を背きにき、とおぼえたれど、髪鬢を刺りた
る法師だに、あやしき心は失せぬもあなり。まして女の御身は
いかがあらむ。いとほしう、罪えぬべきわざにもあるべきかな

(夢浮橋、(6)―三六五頁)

直接的には浮舟の身に即しつつ、世にある出家者一般の通例としても知らされる救済の道の険しさ——形式の上でいかに完全な出家者であつても、なお俗世への欲望を根源から断ち切ることの難い人間現実に対する僧都の深い認識と洞察である。思うに、この物語において、宗教による人間の救済の問題は一貫的持续的な主題と読まれるのだが、それはいつでも、切実な願望と深い懷疑の相克の下に問われ続けてきた。藤壺、六条御息所、女三宮など、出家してなお救済を得ない女たちの不安。あるいはまた光源氏、紫上、薫、大君など、出家を望み求道してなお果せない人物たちの苦惱(光源氏最晩年の出家については、いまは論外とする)。それぞれが辿る生の軌跡は一樣ではありえないが、そこには等しなみに深刻な不安と苦惱のなかで、魂の救済を求めてなお彷徨し続ける人々の遠い宿世が凝視されている。出家によってさえ救われ難い人間存在の弱さ、不確かさ、その根源的罪の状況を深く鋭く認識する物語作者の心眼によって。ひつきょう、浮舟もそうした魂のさすらい人なのであり、その存在の深みまで下り立って遠い救済への方途を共生しようとする横川の僧都は、これまでの宗教者とは異つた「いと尊き人」(手習、(6)―二六七頁)なのである。後に浮舟に宛てて書いた僧都の手紙が、女に還俗を勧奨したもののか否かについて久しい論争があるが、描かれている人間味豊かな僧都の人物像には勧奨説がより近いことを肯んずるにとどめて、いまは深く立ち入らない。

かくて、出家してなお未救済の浮舟の前途は多難と読み来つたところで、物語のすべてが終止する。浮舟は果して救済に至るのか、

浮舟の世界——存在の不安と死、そして出家まで——

否か。岩瀬法雲氏によれば、法華經に親しんでいたこの物語の作者は、人間の救済に絶望していなかつたから、浮舟も「まだ遠い先」「救われる」と説かれる。しかし、母を恋い、薫を思つて法衣の下に一人泣き臥す浮舟の姿に、やがては救済に至る出家者の面影を見定めることがすぐさま可能であるのか。「夢浮橋」巻末の浮舟について、阿部秋生氏は次のように評論する。

彼岸に辿りつける時があるのかどうかもわからないが、おそらく浮舟は、彼岸に辿りつく日があるといわれていることを力にして、彼女自身の歌にいう「尼の浮木」としての浮沈を繰り返すより外にないのである。⁵⁰⁵

果てしないさすらいを宿世とする浮舟の前途が、ここに説き当られていよう。

小論の結語を得たい。見てきたごとく、浮舟の生は、存在の不安とともに始まつていた。それからの救済を求めて、深い苦惱を刻み、やがて死へと赴く彼女の悲劇は、人間存在における罪の状況を際立たせる外の何ものももたらさず、蘇つて遂にする出家さえ、なお救済の見えない、遠い道程でしかない。しかし、いま浮舟が歩み出している小暗い道は、その罪と不安の底を共に踏みぬく僧都によつて先導され、同行されているのであるから、それはもはや浮舟の孤独の道なのではない。いまなお無明を行く浮舟の道に自ら下り立ち、共に歩む僧都は、いわば闇に処して闇を見晴らす魂の先導者なのである。そして、このような僧都を浮舟の救済者として対偶させるところに、この物語の作者の新しい宗教観、救済観が示されたのではないだろうか。すなわち、人間存在における闇の深かさを、宗教の

高みから捨象するのではなく、その根源まで下り立ってこれを共生する聖者こそが、人間の眞の救済者たりうるとする作者の思想である。この意味では、横川の僧都に出会った浮舟だけが、やがては眞の救済へ導かれるであろうただ一人の女性人物だったといえそうなのである。

- 註1 秋山虔氏編『源氏物語必携』「卷々の梗概と鑑賞」東屋の項、一九四頁。
- 註2 高橋亨氏『源氏物語の対位法』一九五頁。
- 註3 柳井滋氏「源氏物語と靈驗—浮舟物語の考察—」(阿部秋生氏編『源氏物語の研究』所収。二二六—二二七頁)
- 註4 註2の書、一九七頁。
- 註5 藤井貞和氏「物語における和歌—『源氏物語』浮舟の作歌をめぐり—」(『国語と国文学』昭58・5)
- 註6 註2の書、一九八頁。
- 註7 吉野瑞恵氏「浮舟と手習—存在とことば—」(紫式部学会編「むらさき」第二四輯所収。)
- 註8 秋山虔氏『源氏物語』二〇五頁。
- 註9 増田繁夫氏「浮舟の出家」(紫式部学会編『源氏物語と和歌 研究と資料』所収。五二—五四頁)
- 註10 鈴木日出男氏「紫上の絶望—「御法」卷の方法—」(『文学・語学』四九、昭43・9)
- 註11 阿部秋生、秋山虔、今井源衛氏校注『源氏物語』(6)の頭注、一四一頁。

- 註12 註11に同じ。
- 註13 註2の書、二一〇頁。
- 註14 小町谷照彦氏「橘の小島」(秋山虔、木村正中、清水好子氏編『講座源氏物語の世界』第九集所収。七二頁)
- 註15 註11の頭注、一五二頁。
- 註16 註9に同じ。
- 註17 註11の頭注、一七八頁。
- 註18 今井源衛氏『源氏物語の思念』一四三頁。
- 註19 註11の頭注、三三一頁。
- 註20 今西裕一郎氏「浮舟覚書」(中古文学研究会『源氏物語の人物と構造』所収。一五六—一五九頁)
- 註21 岩瀬法雲氏『源氏物語と仏教思想』八一頁。
- 註22 阿部秋生氏「現世と彼岸」(註14の書、三一八頁)
- 本文の引用は、註11の『源氏物語』(日本古典文学全集 小学館刊)に拠った。